

# 英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について

## —動作主の不注意による対象の変化を表す場合—

杉村 泰

DOI: 10.18999/stul.30.5

### 1. はじめに

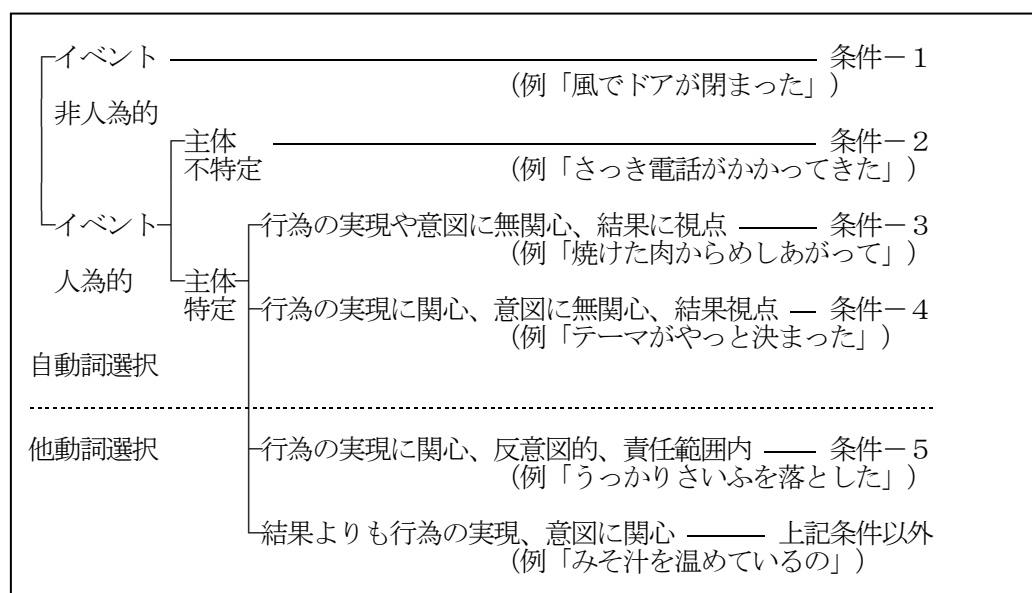
日本語学習者にとって有対動詞の自動詞・他動詞・他動詞の受身形(以下「受身」)の選択は習得困難な項目の一つである。このうち、本稿では動作主の不注意による対象の変化を表す場合について考察する。例(1)、例(2)に示されるように、日本語では動作主の不注意による対象の変化を表す場合、たとえ動作主に意志がなくても、動作主をガ格に取る他動詞表現が使われやすい。例(1)の場合、「単位を落とされた」と言っても間違いではない。しかし、そのように言うと、動作主に責任はなく、不合格にした先生に責任があるような表現になる。また、例(2)の場合、「骨が折れた」と言うと、単に骨折したという事態の発生を表す表現になるのに対し、「骨を折った」と言うと、動作主の不注意によって骨折したという動作主の責任に焦点を当てた表現になる。

- (1) 私は英語の単位{\*が落ちて/を落として/?を落とされて}留年した。
- (2) 私は転んで骨{が折れて/を折って/\*が折られて}しまった。

しかし、日本語学習者にとって、このような場合に他動詞を選択することは必ずしも容易ではない。このことは、杉村(2013c)の中国人日本語学習者や杉村(2015)のカンボジア人日本語学習者の例でも観察される。これに続く研究として、本稿では英語を母語とする日本語学習者(以下「アメリカ(米国)人日本語学習者」と呼ぶ)の例について考察する。

## 2. 先行研究

学習者にとって有対動詞の自動詞、他動詞(、受身)の選択が困難であることは、守屋(1994)、小林(1996)、中村(2002)、曾(2012)など多くの先行研究で指摘されている。このうち、守屋(1994)は日本語の自動詞と他動詞の選択基準には図Aのような条件が関わるとして、条件2~4の場合には人為的なイベントであっても自動詞が選択されると述べている。また、条件5に関しては、「イベントが非意図的に成立した場合でも、主体のテリトリー、責任の範囲でおきた場合は、他動詞を用いることがある」(p.163)と述べている。



図A 守屋(1994)の自他動詞の選択条件

これに関して、守屋(1994)は中級前半から中頃程度の学習者(中国語系 60 名、韓国語系 49 名、英語系 21 名)を対象に、例(3)~(5)のようなアンケートを 23 問実施した。

- (3) ドア[を/が]風でバタンと(閉めた/閉まった)。(守屋 1994 の例①)
- (4) うっかりさいふ[を/が](落として/落ちて)しまってね、今日はお金が全然ないんだ。  
(守屋 1994 の例⑫)
- (5) そのTシャツ、どうしてそんなに(汚して/汚れて)しまったの。(守屋 1994 の例⑭)

守屋(1994)は「動詞の自他の選択の難しさは、程度の差はあれ、自動詞選択のむずかし

さにある」(p.163)として、図1の条件のうち「1から4へと次第に習得が難しくなっていく」(p.163)と指摘している。また、例(4)、例(5)に関しては、表1の集計結果を提示して、学習者の選択について以下のように述べている。

表1 守屋(1994)の集計結果 (★は正答を示す)

	中国語系(60名)		韓国語系(49名)		英語系(21名)	
	総数/内訳(重複)		総数/内訳(重複)		総数/内訳(重複)	
⑫★さいふをおとしてしまってね	37	35 (2)	47		10	
さいふがおちてしまってね	14	12 (2)	1		7	
さいふをおちてしまってね	0		1		4	3 (1)
さいふがおとしてしまってね	11		0		1	0 (1)
⑭★どうしてそんなによごれてしまった	16		15		8	
★どうしてそんなによごしてしまった	44		34		13	

⑫の誤用があらわれたのは「さいふが落ちる」という現象が、意図的には行われにくい点と、文の構造上主体が文中に現れない点、「～してしまった」という結果相にかかわる表現を伴っている点で、自動詞がえられやすいことが一つの理由として考えられる。一方、「さいふが落として」の誤用も同様に選ばれているが、これも「さいふを落とした」では意図的に落とした感じとなると被験者が考え、それを避けようとして生じた可能性がある。もちろんこれらの誤用は、単に形式的な混乱によるとも考えられるが、非意図的で意志に反していても、日本語では主体の責任の範囲での行為であれば他動詞を選ぶという条件(条件-5)があり、その点の理解が不足したためとも思われる。

(守屋 1994:159-160)

⑭の他動詞は⑧<sup>1</sup>と違い、条件-5の主体の意図には反するが主体の責任の範囲にあるために選ばれる他動詞であり、⑧に比べ、他動詞がより積極的に選ばれており、この点も「さいふを落としてしまった」に正答が比較的多かったこととあわせて、よく習得されているようにみうけられる。

(守屋 1994:162)

<sup>1</sup> ⑧「もしもし、背中に何か(つけて/ついて)いますよ。とってあげましょう」

守屋(1994)の分析は、自身も「ひとつまちがうと「あとからつけた理屈」にすぎなくなるおそれが大である」(p.163)と述べているように、後付けの論理になるきらいがある。しかし、日本語の自他選択には①人為的行為か否か、②動作主が特定の否か、③話し手の関心が行為にあるか結果にあるかが関わることを示し、学習者は①②③の順にその処理が難しくなることを指摘している点で重要な研究である。これを受け、筆者(杉村)は守屋(1994)の研究に以下の修正や補強を行うことにより、日本語学習者の自動詞・他動詞・受身の選択に関して綿密な分析を進めている。(杉村 2013a,b,c, 2014, 2015, 2016,2017)

1) 「受身」の追加

守屋(1994)は自動詞と他動詞の選択のみを分析の対象にしているが、学習者の誤用には受身との混同もよく見られるため、本研究では受身も分析の対象に加える。

2) 事態の分類

守屋(1994)の事態の分類は、動作主の特定・不特定に関して分類基準が恣意的になりやすいため、本研究では動作主が特定の個人または複数の人物の場合は「特定」、不特定多数や社会一般の場合は「不特定」と考える。したがって、図Aの「電話」の例は、かりに電話をかけた人物が不明であったとしても、特定の誰かがかけていることには違いないため、本研究では「動作主特定」と考える。また、守屋(1994)では受身の出やすい「被害や迷惑の意味」を表す場合がなかったり、非人為的事態の分類がされていなかったりするなど、より細かい分類が望まれる。そのため、本研究では事態の分類を守屋(1994)の6分類から12分類へと細かくした。(次頁の図B参照)

3) 日本語話者の調査

守屋(1994)では研究者一人で日本語の母語判断を行っている。しかし、この種の研究は個人差による「ゆれ」が大きいため、本研究では多数の日本語話者を被験者として自動詞・他動詞・受身の選択傾向を見る。

4) 学習者の母語での調査

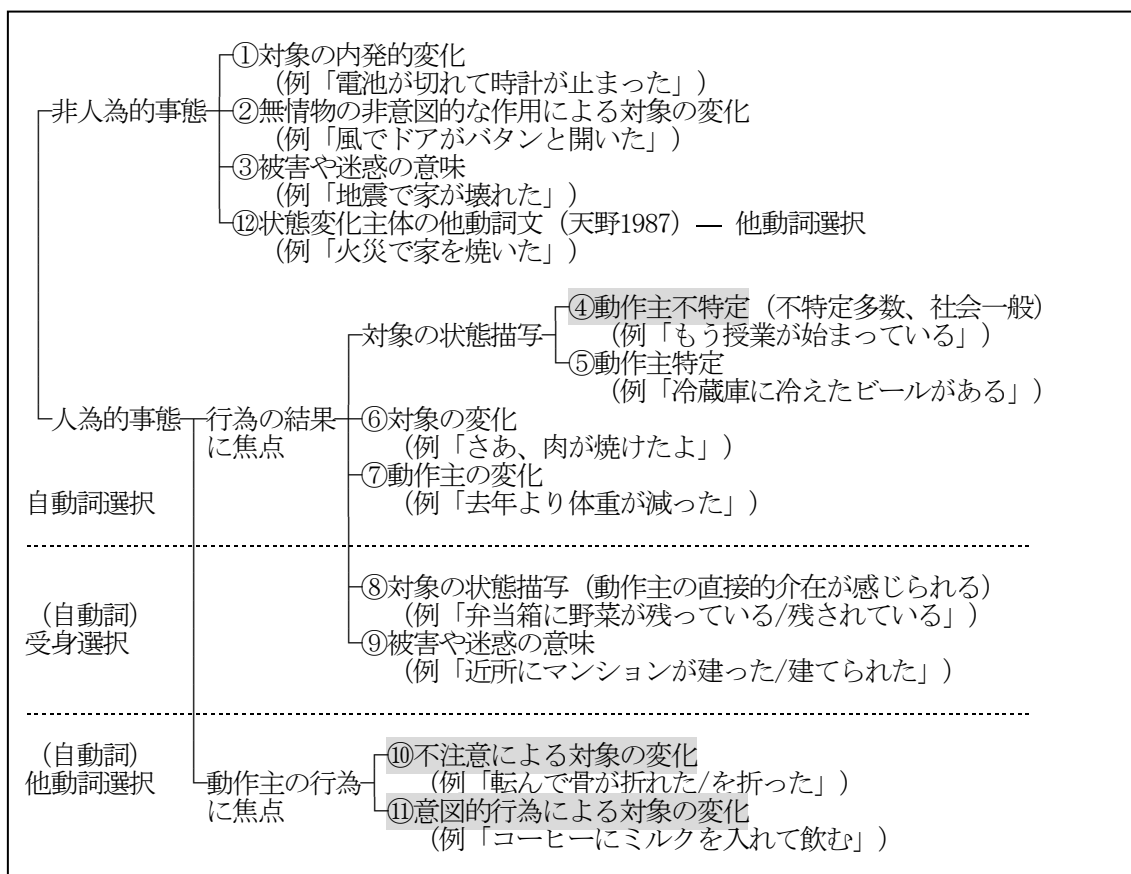
守屋(1994)では日本語の調査のみ行われているが、本研究では学習者の母語でも同様の調査をして、母語による影響の有無を見る。

5) 学習者の習得レベル別調査

守屋(1994)では中級レベルの学習者のみを被験者としているが、本研究では日本語能力試験の合格レベル別に分析する。

### 3. 調査の概要

本稿では、動作主の不注意による対象の変化を表す場合を7つ取り上げ、母語話者と学習者で自動詞・他動詞・受身の選択に関していかなる違いを見せるかについて論じる。そこでまず、守屋(1994)の自他動詞の選択条件に受身を加えて、図Bに示すような12の事態に分類した。このうち事態⑩を主な分析対象とし、比較の対象として事態④と事態⑪についても見る。本稿の考察対象を図Bの網掛け部分に示す。



図B 本稿における事態の分類と母語話者の選択傾向

次に、この分類に応じて合計 60 問の日本語のアンケート項目を作成した。アンケートは守屋(1994)や曾(2012)にならい、被験者に格助詞「が/を」と「自動詞/他動詞/受身」を同時に選択させる方法を用いた。これにより自他の形態的な誤用と自動詞・他動詞・受身の選

択意識とを区別して見ることができる。被験者には、各アンケート項目において最も適当だと思ふ組み合わせを一つだけ選択させた。

また、アメリカ人日本語学習者の母語である英語の影響を見るために、この日本語アンケートを英語に訳したものを作成し、英語母語に自動詞的表現・他動詞表現・受身表現のうち最も適当だと思ふ組み合わせを一つだけ選択させた。ただし、英語アンケートは日本語アンケートを直訳したものであるため、実際とはずれる場合もある。以上2種類のアンケートの被験者は次のとおりである。

[日本語アンケート]

・日本語母語話者

名古屋大学学部生 114 名(2012 年 5 月 8～10 日に名古屋大学にて実施)

・英語を母語とする日本語学習者(アメリカ人日本語学習者)

ウエスタンワシントン大学 70 人(4 年生:12 人、3 年生:13 人、2 年生:43 人、1 年生 2 人)  
(2014 年 2 月 11,26 日、4 月 3 日にウエスタンワシントン大学にて実施)…全員日本語能力試験を受けていないが、ウエスタンワシントン大学の先生によると N2～3 合格レベル程度であるとのことである)

[英語アンケート]

・英語母語話者

ウエスタンワシントン大学学部生 100 人(2014 年 2 月 11 日、4 月 2,3 日にウエスタンワシントン大学にて実施)

以上のアンケート調査をもとに自動詞・他動詞・受身およびねじれ(「を+自動詞」または「が+他動詞」)の選択率を集計した。このうち、本稿で考察の対象とする 11 の表現をまとめると表 2 のようになる。表中の選択率は小数点以下第二位を四捨五入して示してあるため、自動詞・他動詞・受身・ねじれの合計がぴったり 100%にならないものもある。本稿では日本語の「が+受身」と「を+受身」の区別については立ち入って議論しないため、両者を合わせて「受身」とする。同様に、格助詞と自他動詞のねじれについても議論の対象としないため、両者を合わせて「ねじれ」とする。また、表中の「日本人・日」は日本人の日本語アンケートの回答者、「米国人・日」はアメリカ人の日本語アンケートの回答者、「米国人・英」はアメリカ人の英語アンケートの回答者を表す。

本稿では「ねじれ」については考慮しないことにするため、後の議論(図1～図 11)ではここからさらに「ねじれ」の回答を除外して、「が+自動詞」「を+他動詞」「が/を+受身」の合計が 100%になるように計算し直して、自動詞・他動詞・受身の選択傾向を比較することにする。表2の選択率と図1～図 11 の選択率にずれがあるのはそのためである。

表2 自動詞・他動詞・受身・ねじれの選択率(%)

	被験者	自動詞	他動詞	受身	ねじれ
事 態 ④ (対 象 の 状 態 描 写)	1. もう授業(が/を)(始まって/始めて/始められて)いるから急ごう。				
	米国人・英	84.0	14.0	2.0	---
	米国人・日	44.3	18.6	8.6	28.6
	日本人・日	99.1	0.0	0.0	0.9
	2. この町には鉄道(が/を)(通って/通して/通されて)いる。				
	米国人・英	88.0	10.0	2.0	---
米国人・日	32.9	18.6	11.4	37.1	
日本人・日	96.5	1.8	1.8	0.0	
事 態 ① (意 図 的 行 為)	3. コーヒーにミルク(が/を)(入って/入れて/入れられて)飲む。				
	米国人・英	3.0	96.0	1.0	---
	米国人・日	5.7	58.6	4.3	31.4
	日本人・日	2.6	95.6	1.8	0.0
	4. 目が悪くなったので、眼鏡(が/を)(変わった/変えた/変えられた)。				
	米国人・英	5.0	80.0	15.0	---
米国人・日	2.9	35.7	11.4	50.0	
日本人・日	1.8	98.2	0.0	0.0	
事 態 ⑩ (不 注 意 に よ る 対 象 の 変 化)	5. 英語の単位(が/を)(落ちて/落として/落とされて)留年した。				
	米国人・英	1.0	97.0	2.0	---
	米国人・日	14.3	40.0	14.3	31.4
	日本人・日	0.9	95.6	3.5	0
	6. 不注意でポケットから財布(が/を)(落ちて/落として/落とされて)しまった。				
	米国人・英	6.0	77.0	17.0	---
	米国人・日	24.3	32.9	11.4	31.4
	日本人・日	37.7	59.6	2.6	0
	7. 転んで骨(が/を)(折れて/折って/折られて)しまった。				
	米国人・英	2.0	92.0	6.0	---
	米国人・日	15.7	40.0	10.0	34.3
	日本人・日	17.5	80.7	1.8	0
8. 遊んでいる時、不注意で梅の枝(が/を)(折れて/折って/折られて)しまった。					
米国人・英	3.0	91.0	6.0	---	
米国人・日	22.9	28.6	12.9	35.7	
日本人・日	16.7	80.7	2.6	0	

9. 不注意で皿(が/を) (割れて/割って/割られて)しまった。				
米国人・英	16.0	48.0	36.0	---
米国人・日	22.9	28.6	17.1	31.4
日本人・日	22.8	77.2	0	0
10. カレーを食べた時に、シャツ(が/を) (汚れて/汚して/汚されて)しまった。				
米国人・英	18.0	70.0	12.0	---
米国人・日	27.1	30.0	11.4	31.4
日本人・日	37.7	61.4	0	0.9
11. 飲みすぎて胃(が/を) (壊れて/壊して/壊されて)しまった。				
米国人・英	73.0	23.0	4.0	---
米国人・日	31.4	24.3	14.3	30.0
日本人・日	35.1	64.9	0	0

表2において、いかなる場合に「ねじれ」の割合が高くなるのかということも興味深い研究テーマである。しかし、それは別の機会に譲ることにして、本稿では「ねじれ」を除く「自動詞」、「他動詞」、「受身」の選択率のみに焦点を絞って議論する。

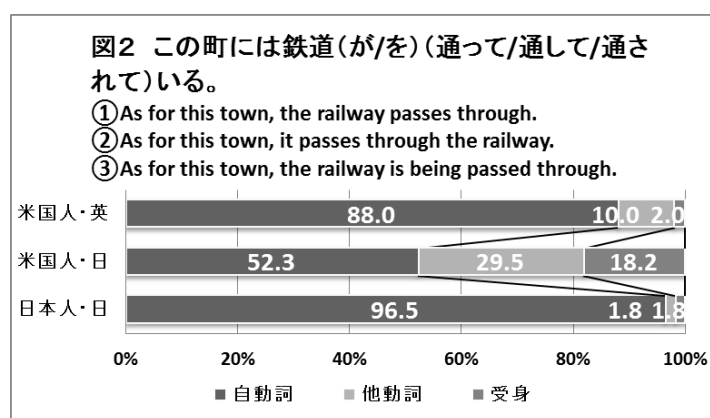
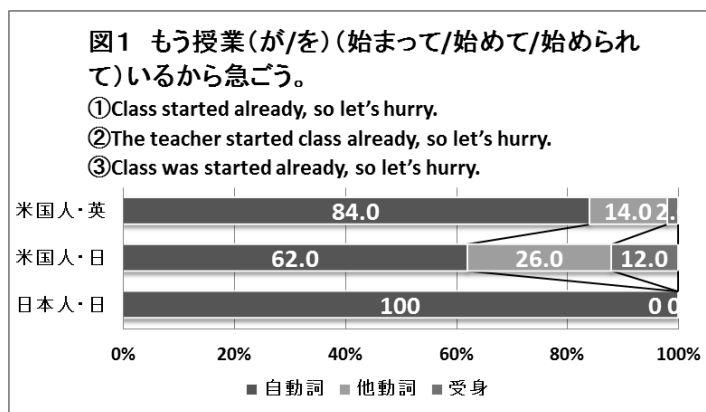
#### 4. (動作主が不特定の)対象の状態描写を表す場合(事態④)<sup>2</sup>

事態④は、動作主が不特定で対象の状態描写を表す場合である(図1、図2)。この場合、日本語母語話者(以下、「日本人」と呼ぶ)は、対象をガ格に取る自動詞表現を選択する傾向にある。図1の場合、授業を始めるのは先生であっても、授業時間は学校の規則で決まっており、先生の意志で決めるわけではない。また、図2の場合、鉄道を通したのは鉄道会社などであるが、特に敷設者のことに話題が及ばない限り、動作主の行為よりは対象である鉄道の存在に焦点が当たりやすい。そのため、図1、図2において日本人はほぼ 100%の人が自動詞表現を選択する。

一方、アメリカ人日本語学習者は、自動詞の選択率は 50~60%ほどと日本人より低くなっている。この場合、母語である英語では対象をガ格に取る自動詞表現の選択率が 80%以上となっているが、日本語では動作主が存在を意識して他動詞または受身の選択率が上がるものと考えられる。

<sup>2</sup> これに関しては杉村(2017)で詳しく論じる。

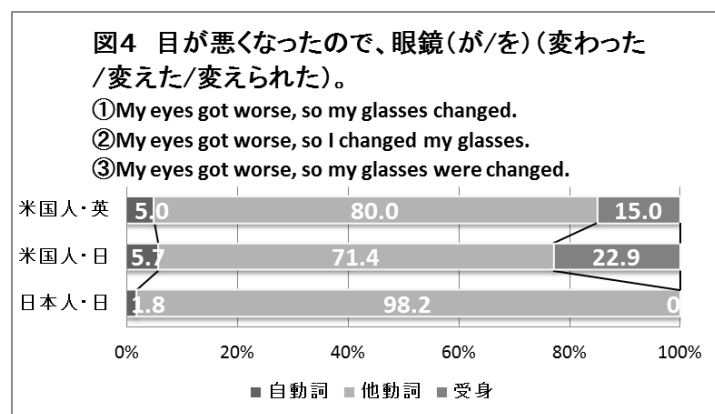
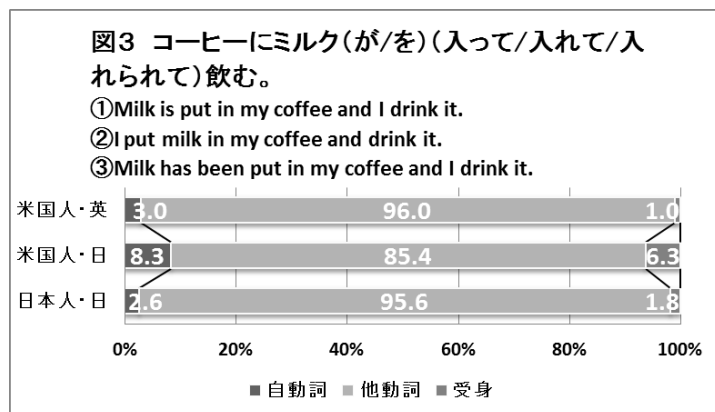




### 5. 意図的行為による対象の変化を表す場合(事態⑪)<sup>3</sup>

事態⑪は、動作主の意図的行為による対象の変化を表す場合である(図3、図4)。動作主の意図的行為とは動作主が何らかの目的のために当該の行為を行うことを表すものである。この場合、日本人もアメリカ人日本語学習者も他動詞の選択率が高く、英語でも他動詞の選択率が高い。このことから、動作主の意図的行為による対象の変化を表す場合は、日本人もアメリカ人日本語学習者も他動詞を選択しやすいことが分かる。

<sup>3</sup> これに関しては杉村(2016)でも論じている。

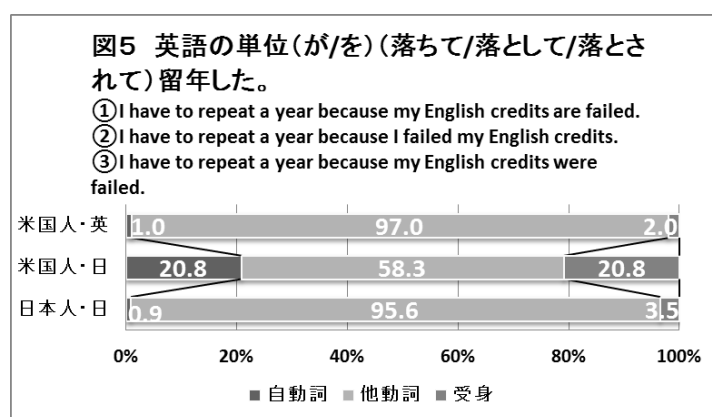


## 6. 動作主の不注意による対象の変化を表す場合(事態⑩)

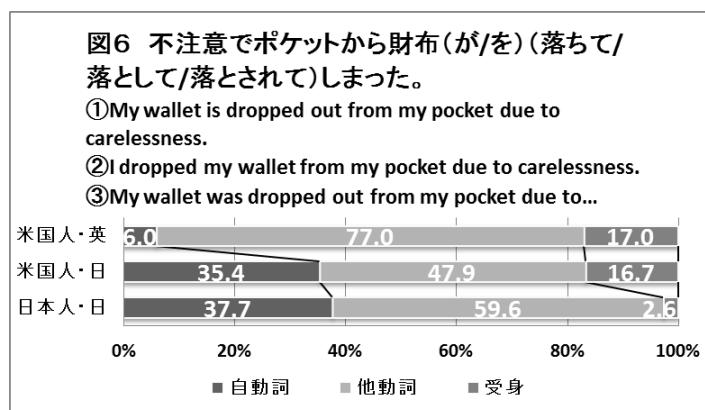
事態⑩は、動作主の不注意による対象の変化を表す場合である(図5～図 11)。この場合、日本人は全体的に他動詞の選択率が高くなる。これは動作主に意志がなくても、すべき注意を怠ったという責任が付きまとうため、動作主の行為に焦点を当てた他動詞が選択されやすいためである。しかし、必ずしも常に他動詞が選択されるわけではないため、アメリカ人日本語学習者に限らず、日本語学習者にはこの感覚を身に付けるのが難しいようである(杉村 2013c, 2015 参照)。以下、図5～図 11 の順に見ていく。

まず図5は、動作主の勉強不足による「単位の不取得」を表す場合である。この場合、日本人は動作主の責任に焦点を当てて、95.6%の人が他動詞を選択しているのに対し、アメリカ人日本語学習者は 58.3%の人しか他動詞を選択していない。この場合、母語である英語では他動詞表現の選択率が 97.0%あるので、英語の影響であるとは考えにくい。

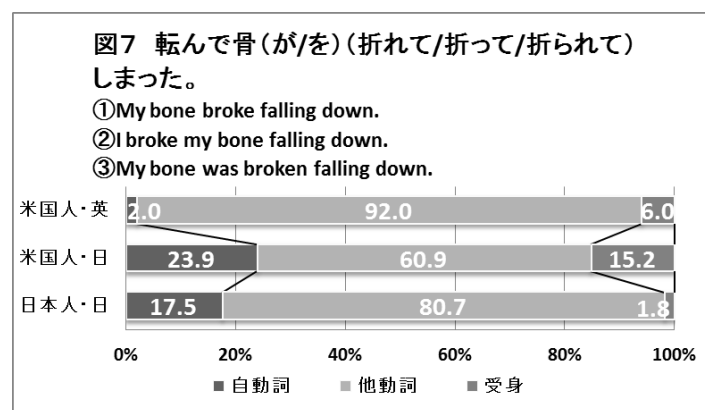
日本語において他動詞形で「単位を落とした」と言うと、本人に責任があるような表現になり、自動詞形で「単位が落ちた」と言うと、本人の責任については不問にし、単に単位の不取得を述べるだけの表現になる。また、受身形で「単位を/が落とされた」と言うと、不合格にした教員側に問題があり、自分は被害者であるという表現になる。このうち、日本語では特に文脈がない限り本人の責任に焦点を当てた他動詞形が選択されやすいが、日本語学習者にはその使い分けが難しいと思われる。



次の図6は、動作主の不注意による「財布の落下」を表す場合である。この場合、日本人は他動詞を選択する人が 59.6%と一番多いが、自動詞を選択する人も 37.7%おり、図5ほど自他の差がついていない。これは「財布の落下」は動作主の不注意によるもの(他動詞)とも、自然現象によるもの(自動詞)とも捉えられるためである。一方、アメリカ人日本語学習者も、他動詞を選択する人が 47.9%と一番多いが、自動詞を選択する人も 35.4%いる。この場合、母語である英語では他動詞表現の選択率が 77.0%で、自動詞表現の選択率は 6.0%しかないので、英語とは関係なく日本人に近い感覚で選択できることが分かる。ただし、アメリカ人日本語学習者は日本人と違って受身の選択率が 16.7%ある。これは被害の意味を読み取って過剰使用したものと考えられる。



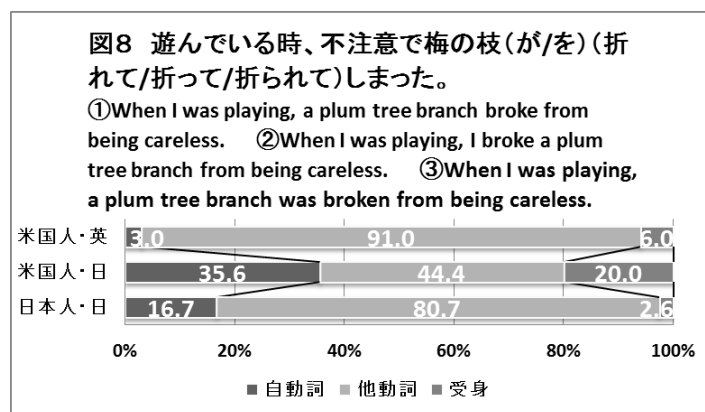
次の図7は、動作主の不注意による「自己の骨折」を表す場合である。この場合、日本人は動作主の責任に焦点を当てて、80.7%の人が他動詞を選択している。一方、アメリカ人日本語学習者の他動詞の選択率は、60.9%と日本人に比べて 20 ポイントほど低くなる。この場合、母語である英語では他動詞表現の選択率が 92.0%あるので、その割には他動詞の選択率が低いことが分かる。また、アメリカ人日本語学習者は日本人と違って受身の選択率が 15.2%ある。これも被害の意味を読み取って過剰使用したものと考えられる。



次の図8は、動作主の不注意による「枝の切断」を表す場合である。同じ「対象の切断」を表す表現でも、図7の「自己の骨折」は動作主自身の身体に影響を及ぼすのに対し、図8の「枝の切断」は動作主とは別の個体に影響を及ぼすという点で違いがある。しかし、日本人の選択率はいずれも自動詞が2割弱、他動詞が8割とほぼ同じ値になっているのに対し、アメリカ人日本語学習者は「自己の骨折」に比べて「枝の切断」の方が自動詞の選択率が高

く、他動詞の選択率が低くなっている<sup>4</sup>。また、アメリカ人日本語学習者は日本人と違って受身の選択率が20.0%あり、これも被害の意味を読み取って過剰使用したものと考えられる。

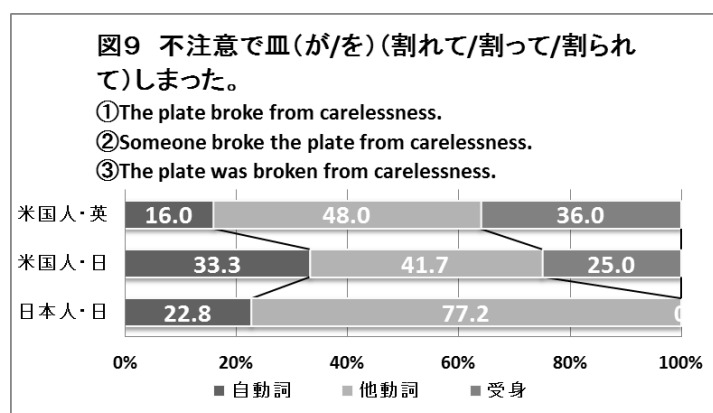
ここで気になるのは、杉村(2013c)で論じた中国人日本語学習者(N1合格レベル)の場合、「自己の骨折」は自動詞が33.3%、他動詞が39.2%で、「枝の切断」は自動詞が8.0%、他動詞が80.0%と「枝の切断」の方が他動詞の選択率が高いのに対し、アメリカ人日本語学習者の場合は「自己の骨折」の方が他動詞の選択率が高いという点である。中国人日本語学習者の場合は、他者(「枝」)への影響を表す場合は他動詞を取りやすく、自己(「自分の骨」)への影響を表す場合は自動詞を取りやすいという説明が可能であったが、アメリカ人日本語学習者の場合はそのような説明ができない。英語では「自己の骨折」も「枝の切断」も同じぐらい自動詞表現を使いやすい(90%以上)ので、母語の影響で両者の違いを説明することも難しい。とりあえず、アメリカ人日本語学習者は「枝の切断」の方が他動詞を選択しにくいことを指摘しておく。



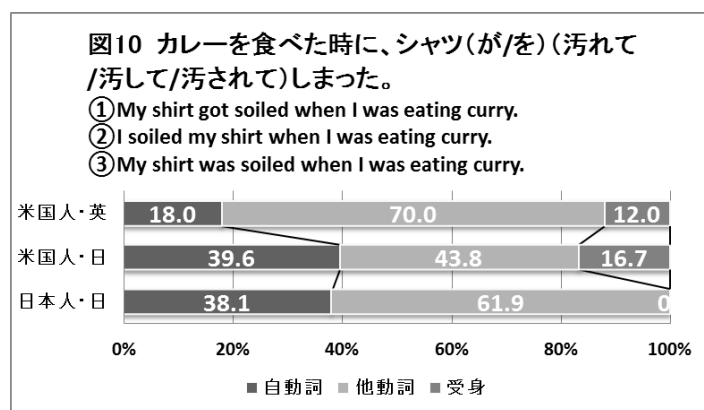
次の図9は、動作主の不注意による「皿の破損」を表す場合である。この場合も、日本人は動作主の責任に焦点を当てて他動詞の選択率が77.2%と高い。一方、アメリカ人日本語学習者の他動詞選択率は、41.7%と低く、図8の「枝の切断」と似た選択率を示している。この場合、英語では図8と違って他動詞表現の選択率が48.0%とさほど高くないので、英語の影響も考えられる。しかし、母語の影響を理由にすると図8が説明できなくなるので、母語とは別に日本語は日本語の中で自動詞、他動詞、受身の選択をしている可能性がある。また、アメリカ人日本語学習者は日本人と違って受身の選択率が25.0%あり、これも被害の

<sup>4</sup> この点で、杉村(2015)で論じたカンボジア人日本語学習者(N2~N4合格レベル)も同様である。

意味を読み取って過剰使用したものと考えられる。

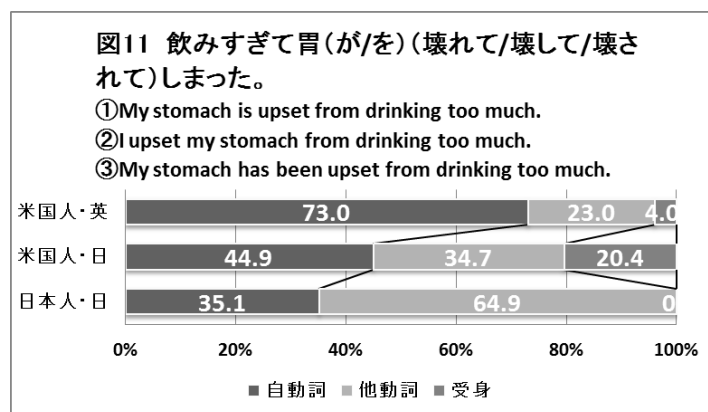


次の図 10 は、動作主の不注意による「シャツの汚染」を表す場合である。この場合、日本人は他動詞を選択する人が61.9%と一番多いが、自動詞を選択する人も38.1%いる。そのため、このような場合に日本人の6割は動作主の責任に焦点を当てて他動詞を選択するが、4割は動作主の責任より情景描写に焦点を当てて自動詞を選択することが分かる。一方、アメリカ人日本語学習者も、自動詞より他動詞の選択率がやや高くなり、日本人と似たような傾向を示している。この場合も、アメリカ人日本語学習者は日本人と違って受身の選択率が16.7%あり、被害の意味を読み取って過剰使用していると考えられる。



最後の図 11 は、動作主の不注意による「胃の故障」を表す場合である。この場合、日本人は35.1%の人が自動詞を選択し、64.9%の人が他動詞を選択している。一方、アメリカ人日本語学習者は、自動詞より他動詞の選択率の方が低く、受身の選択率も20.4%ある。この場合も、アメリカ人日本語学習者は被害の意味を読み取って過剰使用していると考えられ

る。また、この場合、英語では胃を主語にした自動詞表現の選択率が73.0%と高いが、アメリカ人日本語学習者の日本語では自動詞表現の選択率は44.9%とあまり高くないので、母語である英語の影響はあまり受けていないと考えられる。



## 7. まとめ

以上、本稿では動作主の不注意による対象の変化を表す場合を中心に、アメリカ人日本語学習者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について見てきた。その結果、日本人はこのような場合に他動詞を選択しやすいのに対し、アメリカ人日本語学習者は必ずしもそうはならないことが明らかとなった。ただし、いまだ事実の指摘にすぎないので、今後はこのような現象を引き起こす要因について明らかにしていきたい。

付記:本稿は平成 25-27 年度科学研究費基金(挑戦的萌芽研究)「日本語学習者の自動詞・他動詞・受身の選択意識と母語転移に関する実証的研究」(研究代表者:杉村泰、課題番号 25580111)による研究成果の一部である。

### [参考文献]

- 小林典子(1996)「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況」『文藝言語研究・言語篇』29, 筑波大学文芸・言語学系, pp.41-56
- 杉村 泰(2013a)「対照研究から見た日本語教育文法 —自動詞・他動詞・受身の選択—」

- 『日本語学』2013 年6月号 第 32 卷第7号(通巻 410 号), 明治書院, pp.40-48
- 杉村 泰(2013b)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について 一人為的事態の場合」『日本語／日本語教育研究』[4]2013, 日本語／日本語教育研究会・ココ出版, pp.21-38
- 杉村 泰(2013c)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について 一動作主の不注意による対象の変化を表す場合」『ことばの科学』第 26 号, 名古屋大学言語文化研究会, pp.153-170
- 杉村 泰(2014)「日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択について 一動作主の不注意による対象の変化を表す場合」『ことばの科学』第 28 号, 名古屋大学言語文化研究会, pp.145-156
- 杉村 泰(2015)「クメール語を母語とする日本語学習者における中国語の自動詞・他動詞・受身の選択について 一動作主の不注意による対象の変化を表す場合」『ことばの科学』第 29 号, 名古屋大学言語文化研究会, pp.105-120
- 杉村 泰(2016)「英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について 一非人為的事態の場合」『名古屋大学言語文化論集』第 38 巻第 1 号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.3-16
- 杉村 泰(2017)「英語を母語とする日本語学習者における日本語の自動詞・他動詞・受身の選択について 一人為的事態の場合」『名古屋大学言語文化論集』第 38 巻第 2 号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.19-31
- 曾ワンティン(2012)『中国語母語話者における有対他動詞の受身表現と自動詞の使い分けについて』名古屋大学修士学位論文
- 中村祐理子(2002)「中級学習者の受身使用における誤用例の考察」『北海道大学留学生センター紀要』6, 北海道大学留学生センター, pp.21-36
- 守屋三千代(1994)「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』29, 早稲田大学日本語研究教育センター, pp.151-165